九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大内初夫著『俳林逍遥ー芭蕉・去来・諸九尼ー』

石井, 大
山口大学人文学部助教授

https://doi.org/10.15017/12008

出版情報：語文研究. 59, pp.66-67, 1985-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《紹介》

大内初夫著『俳林逍遙—芭蕉・去来・諸九尼』

石井大

『俳林逍遙』は、一見その書名より、俳人の趣味的随想の書と速断され得る。事実は俳諧文学の研究論文集である。先生自ら「あとがき」に記しおかれて「依頼原稿だからといってなおざりな気持で書いたものは一編もなく、ともかくもいつも全力投球で取り組んだつもりである。それゆえに、出来のいかんを問わずやはり著者にはいずれも忘れ難いものである」とある。資料の博捜、考証の綿密と論理の精彩は、著者の面目であり、斯界の人のよく知るところ、正しく至宝の書である。書の目次は次のとおり。

当代俳壇に対する芭蕉の目
芭蕉庵における庵住生活
芭蕉という人——その生活
芭蕉のパトロンについて
芭蕉小論
芭蕉の触覚表現
芭蕉と旅
最後の旅
愛憎の人芭蕉（元禄元年許六宛〈抄〉）
『猿蓑』論
不易流行論の成立—長途行脚の深まる中で
向井去来
蕉風の伝播者
千代女の資料二点
旅の女俳諧師諸九尼——その生涯と俳句
鴉の子——諸九尼の句
枕山発句と諸九と孤遊
筑紫の芭蕉塚
嵯峨の去来墓考
枯野塚——筑紫に眠る芭蕉の吟魂
直方随専寺——俳人浮風・諸九夫妻の墓
豊後小浦今昔記

先生はこれより前に『近世九州俳壇史の研究』を公刊されて、諸賢の名声を得られた。驥尾に付いて言を寄せれば、この書は、歴史に対する深い興味に満たされている。特に文化の伝播していく形態

を時間的変容と、空間的累積の二方向から追求して、近世文学史の真に史的実体を、事実を以って証明することに成功した。俳諧文学の主たる生産と享受の階層的性格を考慮すれば、この書は近世日本における庶民の文化史として、大いなる貢献をなし得るであろう。

前の書が歴史に対する興味にあったとすれば、後のこの書は、良き人間性と、良質の文学に対する著者の意見を開陳したものである。主意は事実の考証にあるとしても、対象の選択に、事を叙する文格に、古人の心に寄する先生の篤き思いは、よく表されているのである。極端な論理的抽象化は採らず、具体的生活の実体と、人間関係（俗に云う「つき合い」）の様態を追求すること、その二つを立論の基本とし、二つの軸の間に生活と文学の相関図を巧みに配置する。そこにみられる、よく中庸を得た批評におけるバランス的感覚が、この書の最大の魅力である。過度に装飾的な文体を廃した、終始平明なる散文の質は、英雄・豪傑・貴紳・顕官の類でなく、悪名なる蒼氓の文学（俳諧）を叙するに最も適して、しかも抒情的である。その意味で、「俳林逍遙」の書名は、この書の体を表わし、先生の文人たる側面を語っているのである。命名は著者の本来をよく評して正鵠を射ると言うのであろう。

前後二つの書を並べて見て、近世社会における歴史と文学について、尽きぬ興味と種々の意見が、あとからあとから湧き出すのを覚えるのは、私一人ではないであろう。読む者の精神を導いて至り着くのは桃源と云うべきかはた又地獄と云うべきか。浅学菲才なる私の嘆きは大きい。

敬白

以上

（昭和五十九年十月　勉誠社刊　三、〇〇〇円）